



東久留米市のビル屋上から望む元日の夕陽



草刈秀紀

WWFジャパン
「野生物と社会」学会 理事

巻頭エッセイ ESSAY

政策と現場をつなぐ

1999年から始まった永田町通い。永田町の住民は、政治と言う「まつりごと」で社会の対立や利害を調整して社会全体を統合し社会の意思決定を行っている。

しかし、永田町に作用する効力は、霞ヶ関の住人とコンクリートジャングルの業態である企業の影響が大きく副作用を及ぼす。まるで生物間の影響を与え合う関係のように。

さて、日本の山々には、魍魎魍魎がいるとよく例えられる。「魍魎」は山林の気から生じるばけものであり、「魍魎」は山川や木石の精霊が妖怪変化を起こす。ある意味、永田町で起きている事象に似ている。

魍魎魍魎が跋扈する永田町の生態を10年程前のWildlife Forum 誌の12巻1号から13巻4号まで「本誌ですくのやぶにらみ！」と題して裏話を書かせて頂いた。10年前の雑誌を掘り起こして、ご一読下されば幸いである。

永田町通いで学習したのは、政策決定者の多くが自然環境に関しては、全くと言っていいほど無知である場合が多いことである。また、霞ヶ関の言うことを鵜呑みにする方々が多い。

政策決定者の多くが、口を揃えて言う「環境は票にならないから」である。「環境問題を語らないと票に繋がらない世の中を作ったのは、貴方達でしょ！」といたい。

地球環境が悪化の一路をたどる現実を捉えつつ、政策と現場をつなぐ糸口を模索しながら藪の中から飛び出すヘビやハチを日々見極めている。忖度と言うマジックワードを使い分けつつ闊歩している。